

差別化加工 継続提案

グループ内連携生かす

山陽染工

今期(2018年3月期)に入ってから受注量は微減で推移。店頭でのカジュアル衣料が全般的に弱含みで推移していることが大きな要因になっている。ただし、生地の商が備蓄販売する定番生地と同社のオリジナル加工を用いた別注生地は比較的安定して受注を得ている。

工と他社の生地・技術とチンク事業2017」にを組み合わせた提案するも参加。書家の高田優子、グロス・サンヨウのさんの作品をデニム「段取り組みを拡大する。今落ち抜染」で再現、スト春行われた福山市の事、技術アピールを続ける。

山陽染工(広島県福山市)は、デニム製織の中国紡織(同)、染色加工の山陽染工児島フアクトリー(岡山県倉敷市)とのグループ企業内での連携による、生地から開発して染色加工までを一貫で行うことでの差別化を強調する。

戸板一平取締役は「定番品を用いてモノ作りするという製品と特色のある生地を用いる開発意欲の高い製品の二極化が表れている」と話す。

児島フアクトリーによる硫化中白染の「ダスティー」加工が駁調のほか、リヨセル複合素材使用な



ど西日本の染色加工場では貴重な長繊維関連の染色加工の引き合いも増えてきたと言った。同社の加

書画の微妙な変化を「段落ち抜染」で再現している